

琉球大学学術リポジトリ

家畜の寄生虫病とその対策

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡嘉敷, 綏宝, Tokashiki, Suiho メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21038

家畜の寄生虫病とその対策

はじめに

家畜の寄生虫の種類は極めて多く、限られた誌数で論ずることは出来ないので、その中で農家の飼養家畜に被害の多いと思われる肝蛭症と豚回虫症について、発育、感染法、症状、治療法等を述べて、寄生虫対策の一助としたい。

1 肝蛭症

(1) 寄生状況

肝蛭は牛や山羊の肝臓や胆管に寄生して被害を与えるもので、日本では特に牛に多く、全国各地に浸潤している牛の30~40%がこの虫の寄生を受けている。肝蛭の寄生によって乳牛は乳量の減少、肉牛では肉量の減少を来し、その損害は年間160億円(1958)を越えているといわれる。一方沖縄においては古くから「チムムシ」として知られており、家畜衛生試験場の調査(1962年5~6月)によると、調査頭数366頭(和牛317,ホルスタイン種49)中皮内反応で陽性173頭(47.2%)虫卵検査で62頭(16.9%)となっている。私も1965年8月から9月に亘って南部地区の乳牛の繁殖調査と関連して肝蛭の感染率を調査(虫卵検査)した結果、310頭中14頭が感染し、その感染率は4.5%であった。私の調査は衛生試験場のそれに比較して感染率が低下しているが、その理由は水田の減少や感染時期の関係によるものと思われる。つまり感染の時期は大体6月から10月頃までで、感染してから成虫となって排卵するまでには最低60日を要し、又その生命も平均9カ月といわれているので、8月9月頃は最低になると考えられる。

(2) 発育および感染法

糞と共に排出された卵子は夏季では約9日後にミラキジウム(仔虫)となり、水中を遊泳して中間宿主であるヒメモノアラガイの体内に侵入、40~50日後にはケルカリアとなって貝から脱出し、水中を遊泳しているうちに水草に附着して被囊する。これがメタケルカリアで、感染能力をもっている。牛や山羊に食われたメタケルカリアは小腸

内で被囊を脱し、腸壁を破って腹腔内に侵入し、肝臓の表面から肝実質に入り、ついで胆管に移行して成虫となる。肝蛭は人にも感染することが知られている。

(3) 症状

症状の軽重は寄生する虫の数によるが、牛で120匹以上、山羊で30匹以上寄生しなければ著明な症状は見られない。通常夏から秋にかけて感染するので、秋から冬にかけて発病するものが多い。一般には慢性の経過をとり、栄養不良、発育不全などの症状を呈する。

(4) 診断

本病の確実な診断をするには虫卵を検査しなければならない。虫卵検査には渡辺法とアンチホルミン・エーテル法があり、いずれも良好な結果が得られるが、ただ感染初期の検出法としては適さない。その外に皮内反応(小野氏法)がある。本法は牛肝蛭診断用アンチゲンを皮内に注射してアレルギー反応の発現度によって診断する方法である。本法は感染後12~19日に陽性に現われるので糞便検査に比し早期に診断が出来るが、反面駆虫後もかなり長期(6~12ヶ月)にわたって反応するので、駆虫後の効果判定には応用出来ない。

(5) 治療法

駆虫薬としてはヘキサクロロエタン製剤のヘクレン・ヘキサゾールが応用されている。投与量は体重1kg当り0.25~0.3gが標準である。これを500cc以上の水に溶解して飲ませる。副作用としては投与後、食欲不振、胃腸機能障害、下痢などが2~7日位つづくことがある。重症牛では副作用が強いので、普通量の半量を使用する。1kg当り30mg、山羊は50~75mgが標準である。駆虫の時期は10月から翌年2月末頃までが適当である。なお予防法としては湿地帯の草を食わないようにすることが大切である。(渡嘉敷綏宝)

来月号に続く